

冬十一月、左大弁葛城王等、姓橘の氏を
賜はる時の御製歌一首

一〇〇九番

橘は実さへ花さへ その葉さへ 枝に霜降れど
いや常葉の木

橘宿禰奈良麻呂、詔に応ふる歌一首

一〇一〇番

奥山の真木の葉しのぎ 降る雪のふりはます
とも 地に落ちめやも

冬十二月十二日、歌舞所の諸の王・臣子等、
葛井連広成の家に集ひて宴する歌二首

一〇一一番

我がやどの梅咲きたりと 告げ遣らば 来と言
ふに似たり 散りぬともよし

一〇一二番

春されば ををりにををり うぐひすの 鳴く我
が山齋そ 止まず通はせ